

IJCAI-03 蓮根ワークショップ 論文・コンテスト参加演奏募集

締切が近付いて参りましたので、再度ご案内させていただきます。第 3 回めの蓮根ワークショップがIJCAI 2003 (18th International Joint Conference on Artificial Intelligence) のワークショップとして開催されます。

日程: 2003 年 8 月 11 日 (月)

場所: アカプルコ (メキシコ)

本ワークショップでは、演奏生成に関する論文とコンテスト参加演奏を募集します。皆様からの論文、演奏の投稿、参加をお待ち申し上げております。

募集要領の詳細については、<http://shouchan.ei.tuat.ac.jp/~rencon/IJCAI-03/> をご覧下さい。

今後の日程:

論文投稿締切	2003 年 3 月 1 日
論文採否通知	4 月 1 日
論文カメラレディ送付	4 月 25 日
テクニカルノート締切	4 月 25 日
演奏提出締切	7 月 14 日
ワークショップ当日	8 月 11 日

実行委員, プログラム委員:

平田圭二 (Chair, NTT コミュニケーション科学基礎研究所)
Roberto Bresin (KTH)
平賀瑠美 (文教大学)
片寄晴弘 (関西学院大学)
Ramon Lopez de Mantaras (CSIC)
Gerhard Widmer (Univ. of Vienna)

本件照会先: 平田圭二 (NTT) hirata@brl.ntt.co.jp

情報処理学会論文誌 『音楽情報科学』特集への論文投稿のご案内

情報処理学会 「音楽情報科学」特集号編集委員会

情報処理学会の論文誌において、下記の要領で『音楽情報科学』をテーマに特集号を企画しております。作・編曲、演奏、採譜、伴奏、ユーザインターフェースなど音楽情報科学全般についての最新の研究やシステムに関する技術論文、音楽コンテンツ分野の発展につながる事例報告や考究論文を募ります。

音楽情報科学研究会および関連する各研究会の研究開発者の方々に対して、広く論文を募集いたしますので、奮ってご投稿下さいますよう、ご案内いたします。

対象分野: 音楽と計算機双方に関連した領域全般

- ・ 計算機の介在した作・編曲 / 演奏 / 伴奏
- ・ 音楽コンテンツ技術
- ・ デジタル・電子楽器
- ・ 音楽信号処理
- ・ AI と音楽
- ・ 感性情報処理
- ・ 音楽情報検索
- ・ 音楽学・芸術への応用

投稿要領:

論文の執筆要領 「情報処理学会論文誌」原稿執筆案内によります。論文投稿規約については、<http://www.ipsj.or.jp/toukou/kitei/shippitu.html> を参照下さい。

査読手続き： 通常の論文誌投稿論文と同一です。
投稿締切： 2003年6月30日(月)
投稿論文には、『音楽情報科学特集』と朱書して下さい。
特集号予定： 2004年3月

第48回研究会 研究会報告

小坂直敏

12月20,21日にくらしき作陽大学にて、同大の加藤充美さんの企画により第48回音情研の研究会が行われました。この研究会にはインターカレッジ・コンピュータミュージック・コンサートが併設され大変にぎわった発表となりました。研究会では制作系関連のテーマとしてCort Lippe氏と葉孝之さんに自作について解説してもらいました。また音楽学の方では菊地さん、矢向さんのGIDA_U(XMLを用いた長唄譜のデータ形式)に関する発表がありました。こうした発表もさらに増えてくればこの研究分野の領域が広がり会も発展しそうです。他に作曲への理論が2件、イベント報告2件、制作ツール1件という内容でした。大変充実しており、制作系関連のテーマの一つの在り方が示されたように感じました。作品解説2件についてはもう少し発表時間が長かった方が良かったかもしれません。また作曲理論／システムの2件にはそこから創られる音楽をきちんと聞きたい、との感想を持ちました。なお、今後この分野の発表からの音楽論文が誕生して行くことを期待しています。

以下では、インターカレッジコンサートの感想を参加した二人に書いていただいたので紹介します。

インターカレッジ・コンピュータミュージック・コンサートについての感想

常盤拓司(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科)

今回のインターカレッジコンピュータ音楽コンサートで私の参加は5回を数えることとなった。そのなかでも、今年のコンサートは、特にユニークでまとまっていたように感じた。このような印象は、初の試みとして“参加各校ご推奨作品”によるメインコンサートが組まれたことと、出品作品のどれもが、それぞれに面白く、イベントが全体的に充実していたことにある。

特に、このメインコンサートの試みは、今後のインターカレッジを考えるにあたって非常に意義深いことだったのではないと思う。聞き手側にとっては、メインコンサートが示されるということは、どのコンサートを聞くべきなのかが明確にされるということである。これは主催側が、聴き所を明示するということである。それは、将来的には、イベントとしてのインターカレッジコンピュータ音楽コンサートに対して品質保証ということを考えていくということであり、その仕組みや下地、条件などを整備していくということへとつながっていくことになると思われる。そして作品を発表する学生にとっては、これまでのアンデパンダン的な参加・発表ではなく「学校代表」という高次の目標ができたということができる。それは、ただ作って出すということではなく、作品の内容に対する責任感や、作品を認められる面白さということへとつながっていくことになるだろう。

また、上演された作品の内容を思い返してみると、作品のレベルの向上は著しいものであった。このことは、この数年参加するたびに感じてきたことである。しかし、今年はメインコンサートで上演された音楽系ではない学校の作品の内容が飛躍的におもしろくなってきていることから、今回、特に強く感じた。そして、このメインコンサートの印象に加えて、他のコンサートで上演された作品のバラエティーの豊富さはメイン以上に楽しいものであった。メインではないコンサートでは、各校の代表ではないということもあってか、各校の学生の独自性がよく現れていたと感じた。

私の作品のような極端な方法論先行型の作品もあれば、コンピュータ音楽かどうかの判断の分かれ目を狙った作品、コンセプト性が強い作品など、一言ではくくることのできない、記憶に残る作品が多かった。そして、来年は誰がメインのコンサートに出品するのだろうかという期待を持って鑑賞するというメインでは味わうことのできない楽しみ方もあった。来年、この、「参加各校ご推奨作品」の制度が残るのかどうか分からないが、ぜひ続けていってもらいたいと思う。

より「参加」型のコンサートであるべきでは！

中村滋延（作曲家，九州芸術工科大学音響設計学科）

インターカレッジ・コンピュータミュージック・コンサートについて感想を述べる際、それがどの立場からなされるかによって、その中身はかなり変わるだろう。私には参加者、具体的には作品出品者の大学での教師、としての立場からの感想が求められている。

もし、コンサートの一般聴衆としての感想を求められたとすれば、その感想は陰しいものになるだろう。作品の質もさることながら、特に、頻繁に起こる演奏機器のトラブルによる上演開始の大幅な遅れは、聴衆にとっては不愉快極まりないものだ。それがコンピュータ音楽演奏会にありがちなものだとしても、聴衆が一方的に我慢させられることではない。（ただし、私には偉そうなことを言う資格はない。今回、私の大学からの出品作品も上演開始が不必要に遅れてしまったからだ。）

上演開始の大幅な遅れをはじめとするトラブルなどに対してこの演奏会の聴衆が寛容なのは、そのほとんどが参加者の意識でいるからなのだろう。少なくとも私には制作時の教室での雰囲気がそのままコンサート会場に持ち込まれているように感じられ、演奏機器のトラブルでさえも我がこととして見守ることが出来た。そしてどの作品も身近に感じられ、自然に聴くことに集中でき、退屈はまったく感じなかった。（これは目でもたのしめるマルチメディア的な作品が多かったことも理由なのであろうが。）

もちろん、個々の作品の質そのものやその評価については言うべきことがたくさんある。ただ、そのために与えられたスペースは小さく、作品名を羅列する以上のことはできそうもない。そうした意味で残念だったのは、作品についての意見を交わす場がなかったことである。「参加」型としてインターカレッジ・コンピュータミュージック・コンサートを位置付けるならば、その場が用意されるべきだったかも知れない。少なくとも、学会における発表後の質疑応答のように、そのようにしたくなければ、一般聴衆の陰しい感想に耐え得るものを徹底して目指すべきであろう。だが、このコンサートの性格や、その実施実態を考慮すると、「参加」型でしか実施し得ないし、またそうすべきであろうと思う。

そこで、未来に向けていくつかの提案をしたい。それは；

- 作品出品者は作品上演を行なうだけでなく、プログラムに詳しい解説を書く。せめて学会発表の予稿集原稿の4分の1程度の内容と分量で。その際、創作の主観的な意図ばかりではなく、作品の構成・構造や上演システムなどについても論述する。必要な場合は図を用いて。
- コンサート会場において出品者は上演作品について口頭で解説する。その際、曖昧な語り口を避けるために学会発表と同じように原稿を用意する。概ねプログラム解説と内容は一致するが、それでよい。
- （時間の都合上、必ずしもコンサート会場で行なう必要はないが、）聴衆からの意見や質問を出品者に向けて募り、出品者に答えさせる。もちろんその場には司会者を置く。ただし、司会者は固定せず、数作品ごとに変更する。

というものである。形態が学会発表に似てきた。インターカレッジ・コンピュータミュージック・コンサートは教育活動の一環でもある。その点において、そこで学生にきびしい思いをさせることは必要なことであろう。